

第32回 Kozoom28 テーマ 「春を呼ぶ節分祭」

清水健二

新型コロナウイルス感染拡大で、日常生活が大きく変化し、3年に亘り四季に執り行われる様々な行事は、制限されたり、中止になったりした。やっと今年は、年初から24節気に当たる立春の行事がスタートできる流れに戻ったように思える。

立春の前日は節分で、昔から「鬼は外、福は内」の呼び声が聞かれる鬼追い式や鬼追儺（おにやらい）の儀式が繰り広げられてきた。寒く暗い冬の日々から温かで明るい春を迎え入れる気持ちから、不幸に見舞われた人達は家の中に沈滞して居るであろう厄を払い退ける日となっていた。疫病神＝鬼、天狗、妖怪の翁などを追い出すため炒り豆を投げたり、玄関戸口に棘のある柗（ひいらぎ）や臭い匂いのする鰯の頭をくくり付けて、鬼払いをしたりする家



柗と鰯

庭が多かった。最近では都会では見られなくなったし炒り豆（魔滅＝まめ？）も関東あたりは落花生に変わってきたようだ。一方各地の社殿では大々的に豆まき行事や、鬼追い神事が行われるようになってきた。

私は、サラリーマン時代に日本各地の自治体が発注する環境整備施設の建設に従事し、建設現場の節分行事によく出会い関心を抱いていて、定年後改めてその地を訪ねて楽しんできている。今回近場の社殿で行わ

れる節分行事をご紹介してみようと思う。
現在居住している八尾市でも古くから、寺
社を中心に昔からの伝統行事が引き継が
れて、多くの人たちが楽しみに行事に参加
している。

拙宅に近いところに、大黒天を本尊とす

る大黒殿があり、ここでは鬼は出てこず、福を招く七福神が登場して来訪者を迎え入れてく
れる。正午に始まってもっぱら掛け声も「福は内」である。私も出かけてどっさり福豆を頂



福豆まき・七福神と(八尾市)



戎っさんと福豆

戴して来た。夜はこれも近くの八尾天満宮に出かけて節分祭を
楽しんできた。昔からの由緒ある神宮で、隣合わせに戎っさん
の本殿があるので、祭事も盛り沢山で境内は大賑わいになる。
まず神事が終わると櫓から豆が撒かれる。飛んでくる福豆袋の
取り合い合戦が始まる。やがて松明を持って暴れまわる赤鬼、
青鬼、天狗の登場に場内は騒然となる。幼児等は怖がって泣き

叫ぶが大声で厄

払いができるというので、親も鬼に味方して
子供を泣かせる。また獅子頭も現れて練り歩
く。獅子舞の原点はインドで、ライオンは強



鬼追い式(鬼と獅子頭) 八尾市



鬼追い式(お多福と法螺)八尾市

力な霊力があるとされ悪魔払いとして霊獣として崇められている。やがて中国で伎楽に発展し、日本ではお神楽に獅子舞が出現するようになったという。そのいわれもあって、獅子頭に頭を噛んでもらうと、邪念も失せ賢くなるというので、親

子が獅子頭を呼び込むから、獅子頭も必死の仕事になる。やがて場内の喧騒も法螺と鉦・太鼓の音と共に鬼追いや厄払いが終わると、お多福達が鈴を鳴らし穏やかな行列となって、1時間も超す節分祭が終了する。来訪者達の晴れ晴れとした表情にこちらも春を迎えた気分になる。

生駒山の麓にある枚岡神社は以前、年の暮れに行われる「お笑い神事」についてご紹介したことがあるが、この神社の節分祭は鬼は出ないので豆まきもしない。千燈明を灯し、祈祷の護摩を焚いたり、巫女が大釜で熱湯をつくって、笹の葉っぱで熱湯をかき回し、振り回す「湯立て神事」をして厄払いする。もっぱら火と水による幸運を呼ぶ祈願祭である。



湯立神事(枚岡神社)

日本の仏教寺院第1号に当たる奈良県明日香村に飛鳥寺がある。そのすぐそばに飛鳥座（あすかにいます）神社があって、2月初旬の日曜日に節分祭が執り行われ、天下の奇祭と



おんだ祭(飛鳥座神社)



おんだ祭(飛鳥座神社)

呼ばれている。境内の舞台上で演じられる芝居の第1幕は牛に扮する役者と百姓の役者が、農耕作業をユーモラスに演じ五穀豊穡を祈願し、第2幕は夫婦和合の夜の営みをリアルに演ずる。観客はヤンヤの拍手で笑い興ずる芝居である。もともこの神社は、陰陽石があちこちに祀られて安産、子育ての神さんで知られ、子孫繁栄を願う人が昔からお参りし、祭りも賑わう所である。神社の周辺は田園地帯だから、天狗や般若の面を被った男たちが、割竹のササラを振りかざし見物客を追い回し 尻を叩いて厄払いをしてくれるのである。鬼追いでなく逆の行為をする祭りである。

各地で様々な祭事があって、思い出すとも好きな私は枚挙にいとまが無いが結構訪ね歩いている。しかし伝統の継続性と迫力は、奈良の東大寺二月堂の修二会（お水取り）は圧巻だと思う。毎年3月1日から14日間続けられていて、今年は1272回目で大戦中も中止した事は無いという。何本も大きな松明を舞台から振り回し、お堂を焼くほどの火炎で、火

の海となる。舞台の欄干下に居る見物客は火の粉を浴びて邪気払いをし、燃えカスを持って帰って神棚に供えて身も心も清めるといふ。堂内では練行衆達の達陀（だつたん）の激しい行が繰り広げられて居る。



奈良二月堂修二会

科学技術の発達した現代社会では、こうした祭事は戯事で娯楽化しているように思えるが、私は廃れること無く永続していくと信じている。古代から天災や疫病で命を落とし、対処すべき術も知らない時代に生きた人々は、自然の脅威を恐れ、それを回避する方法もなく、只々天に祈るしかなかっただろう。翻って現在の我々も変わらない現実を生きている。

東日本の大震災や先日のトルコの地震は頑丈な建物も倒壊し、一瞬に何万人の命を奪う惨事になっている。今日の自分や家族の存在は明日も在ると確信できないのである。自分を支配する何か、仮にそれを神仏だと思えば、神仏に祈りたくなるのも不思議でない。自然は人々を悲劇のどん底に落としもするし、五穀豊穡の恵みや美しい風景も提供してくれ、心を癒やしてくれもする。冬が来て木々は葉を落とし、冬眠する動物も春が来ればまた新しい息吹を取り戻し再生する喜びに生きる輪廻（りんね）の世界である。身の周りにいた親しい人の他界を知らされる度に無常の想いを抱く。しかし輪廻の世界を信じ、明るい春を呼ぶ気持を持ち続けたいと思っている。

先日、TVで人気の番組、夏井いつき先生のクレバト俳句会で、立川志らくさんが詠んだ
「もうちょっと 生きてみるよと 豆をまく」は、今の私の心境である。

令和5年2月 記